

渡島でアジア・アフリカ支援米の田植え行われる

晴天に恵まれた6月2日（土）、七飯町・池田氏所有の水田には、多く子供たちを中心に老若男女50名が集まり、今年度のアジア・アフリカ支援米作付け（田植え）が行われた。

小中学校の運動会時期と重なり、参加人数が危ぶまれていたが、各産別・単組・地区連合の協力もあって例年並みの参加状況となり、澄み渡る青空のもとで作業が進められた。



昨年までは北斗市において行われていた取組みは、栽培方法の変更や諸事情から新たな協力者を模索してきたが、道南地区農民連盟や全農林函館、さらには地区連合会の努力もあって七飯町中野・池田誠悦氏の協力を得ることとなり、今年度の作業となった。



冒頭挨拶に立った食・みどり・水を守る道南地区労農市民会議・残間議長（連合渡島地協副会長）は、世界の食糧事情の中における日本の飽食・食べ残しに触れ、この体験作業を通じて食の安心・安全と、食の大事さを学んでほしいと参加者に訴えた。

また、来賓として参加した連合渡島地協・長谷川会長、道南農民連盟手塚委員長、更には水田所有者の池田氏（七飯町議）からも、「体験を通じて、育てる苦労や成長過程を学ぶことは将来に向けて重要なことであり、この取り組みの意味をしっかりと受け止めてほしい」と、其々からの訴えを行い、いよいよ田植えの開始となった。

ぬかるむ水田の中に恐る恐る素足を入れたものの、慣れない感触と思うように動きが取れない状況に、最初は悪戦苦闘状態にも。とりわけ体重の軽い子供に比べて、大人は踏み出した足を抜くのにひと苦労で、わが子の前で苦笑いする場面も。

それでも時間の経過とともに作業も次第にスムーズに進むようになり、投げ込まれた苗の束を受け損なって泥だらけになったり、子供を気遣いながらも一緒に作業する心地よさに顔がほころんだり、暖かい日差しで覆われた水田には、和気藹々とした模様とわが子を見守る優しい親の顔が広がっていた。



おおよそ1時間半に及んだ作業を終えて、後ろを振り返ってみれば、事前に引いてもらった直線にはほど遠く、どちらかといえば曲線を描いて苗が植えられていたのは、毎年みられる光景でもあった。

最後に、残間議長からお礼を兼ねた閉会の言葉が述べられ、秋には大きく実った成果の

稲刈りへの参加と、10月に行われる「第9回食と環境まつり」への家族揃っての参加を要請し、参加者全員で記念写真を撮影して今年度の田植えを終了した。

また、終了後には場所を移動して「昼食・交流会」も行われ、多くの家族の参加で賑やかで楽しい時間を過ごした。